



被爆80年 高校生が描いた原爆絵画パネル展

平和を思う絵に足を止めて——子どもから大人まで心を動かされて

原爆が広島・長崎に落とされてから、今年で80年になります。これに合わせて、8月5日(火)から7日(木)までの3日間、SSプラザせんだいで「高校生の描いた原爆絵画パネル展」が開かれました。このパネル展は、「2025国民平和大行進薩摩川内実行委員会」をもとにした実行委員会が行ったもので、小学生からお年寄りまでたくさんの市民が訪れました。絵の前で足を止め、涙ぐむ方も多く見られました。

被爆者の体験を絵にして伝える

この絵は、広島の基町高校の生徒たちが、被爆体験を語る人の話を聞いて描いたものです。広島平和記念資料館の協力のもと、

来場者の思い アンケートや署名も

た高校生にとっても、戦争や平和について深く考える機会になっています。

会場には、核兵器禁止条約への参加を求める署名や、募金箱、感想アンケートも置かれていました。展示をじっくり見たあと、多くの方が署名したり、感想を書いたりしていました。

中学生の感想から

中学生からもこんな声が届きました。「原爆は色々な人になるいききょうをだしたし、色々な人がとても悲しんだことがわかりました。戦争がおきない平和な社会になってほしいと、心から思っています」

こちらくらの相談所
(No. 619)
携帯 080-3996-0237 (井上)
なんでもご相談ください。



(入来町) 駅前温泉
泉場の歩道、今年もアスファルト舗装へ！
「歩道のラバーが古くなって歩きにくい」との声が、昨年来入町の駅前温泉場の利用者が寄せ

子どもたちも真剣に

初日に来た小学生が、2日目にも訪れてメモを取りながら絵を見ていた姿がありました。小さな子を連れお母さんが、子どもと一緒に絵をじっくり見て、感想を書いている姿も

「平和の大切さを感じました」

来場者のひとりには、「戦争の悲惨さがよく分かる絵だなと思いました」と話していました。高校生たちが描いた絵は、ただの作品ではなく、戦争の記憶を受け取り、未来へつなぐための「ことばのないメッセージ」です。このパネル展を通して、一人ひとりが平和について考えるきっかけになったことが、なにより成果だったのではないのでしょうか。



パネル展の準備風景 (= 5日、SSプラザせんだい)

特集 「インボイス制度」 調べてなに？

小さなお店やフリーランスに何が起きているの？

2023年10月から「インボイス制度（適格請求書保存方式）」が始まりました。これは、消費税の仕入税額控除を受けるために、「インボイス（登録番号付きの請求書）」が必要になるという新しいルールです。

■ どういう仕組み？

消費税には、「仕入れにかかった税金を差し引ける（仕入税額控除）」という仕組みがあります。でも、インボイス制度のもとではインボイスを発行できないのは、課税事業者だけ※年商1000万円

以下の免税事業者は、インボイスを出せない※インボイスがないと、取引先は税金分を控除できなくなる、そのため、取引先から「インボイス出せないなら取引できない」と言われる事態が全国で起きています。

■ 「ズルしてる」って本当？

政府は、「免税事業者が消費税分をもらって納めていない。不公平だ」と言います。実は、消費税は「預かっているお金」ではなく、事業者の売上にかかる税金とされています（東京地裁1990

■ 誰が困っている？

フリーランス（イラストレーター、声優、ライターなど）、農家、林業、漁業、小さな商店、職人、教室や個人塾の先生、高齢者や障がい者の就労支援事業所など、こうした人たち

■ 地域のくらし・経済にも影響

小さな事業者が立ち行かなくなれば、地域の経済や文化、人とのつながりにも影響します。特に、子育てや介護と両立して働く人、創造的な仕事をしている人たちが打撃を受けています。

■ 声を上げれば変えられる

全国で「インボイス 署名や意見書提出、議 中止・見直し」を求め 会での意見表明も行わ る運動が広がっていま れています。

※今週の「エプロンおばさん」は休み、来週の「民報きずな」の発行は休みます。

No. 51



映画評と案内 それでも私は (2025)



それでも私は



黒川の女たち

1995（平成7）年3月、社会に大きな衝撃を与えた地下鉄サリン事件をはじめ、一連のオウム真理教事件の首謀者とされ、2008（平成30）年に死刑が執行された麻原彰晃こと松本智津夫の娘である松本麗華（まつもとりか）さん。彼女の41歳までの6年間の出来事を記録したドキュメンタリーです。ある男性と松本麗華さんとの対話から始まります。お互い、張り詰めた緊迫感。その男性は、弟が保険金殺人事件の被害者となり、後に死刑が執行された犯人と刑務所で面会をし、自身の心の変遷を記した著書がある原田正治さん。ふたりがそれぞれの立場を、静かな対話で知り合おうとします。映画のポスターに、社会は彼女の人生を許さなかった、とあります。大学受験に合格も大学からの入学拒否。職場では突然の解雇。銀行口座を開設できない（銀行側が拒絶）。事件後、家族は離散状態といいますが、彼女には幼い頃の父の記憶が鮮明にあります。優しい父であったと語ります。多くの死傷者が出た大事件。現在も苦しみが続く被害者。加害者の家族であり、事件当時12歳であった彼女は事件以降、バッシングを受け続けま

す。図らずも極めて特殊な環境で育ち、彼女なりの苦しみの中で、もがくように生きていくのです。が、それでも自分の人生を生きたい、生きていくことを実感したいという気持ちがわかるのです。1週間の上映が8月4日に終わりましたが、再上映を期待します。次に、前号で紹介した「太陽（ティダ）の運命」が、影響を受け再映されます（8月16日、9月1日から7日まで。ガーデンスシネマ）。最後に、気になる次の映画は、「黒川の女たち」（8月7日から11日まで、ガーデンスシネマ）です。（紫霞間太郎）



←中俣先生のブログはこちら

中俣先生の つれづれなるままに (804)



頂いた詩誌をよんでいたら、「かからはし」ということばに出合った。古語で、意味は「かかわって離れがたい。束縛されて動きが取れない」と。「かから」が気になって、古語辞典を紐解いてみた。そこには「サルトリイバラ」とあって、別名を「山帰来」「カカラ」と出していた。かから、かからと、ことばを転がして、開いて「かからん団子」から「かからん刺さん」という、母から聞かされたことばが飛び出してきた。そこで分かったことだが、幼少のころからずっと、「かからん団子」とは勝手に取って食べてはいけない団子と覚えていたが、けなげな子と覚えていたが、なんのことはない、サルトリイバラの葉っぱで包んだ団子と分かった。勝手に食べてよかつたのだ。もう一つの「かからん刺さん」は、「関わりさえしなければ、痛手を受けることはない」。これだけは幼少のころから分かっていて、そこにサルトリイバラが絡んでいたとは。うーむ。本を読むことは大事だ。改めて納得した次第。それにしても母は、「かからん団子」を勝手に食べてはいけない、サルトリイバラの力を借りて諭していたような気がする。母は母なりに、悪知恵を働かせて、食いしん坊の私を戒めていたのだ。いくら私の頭が幼稚だからといって、これは許せないなと、今になって憤慨する。そのことを知っていたら、今では見かけなくなたの「かからん団子」が恨めしい限りだ。（児童クラブ支援員）